

第29回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会

第29回言語教授法・カリキュラム研究会全体研究会は、「外国語教育で多読を成功させるには」というテーマで2010年7月10日（土）午後13時30分から511講義室で開催され、41名の参加者があった。

- ◆ 開催日時 2010年7月10日（土）13時30分～15時55分
- ◆ 受付時間 13時～
- ◆ 開催場所 甲南大学 5号館1階511講義室

◆ 次 第

13:30 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 胡 金定
13:40～15:00

講演 『外国語教育で多読を成功させるには』

近畿大学法学部講師
高瀬 敦子

プロフィール

土佐塾中・高等学校（高知県）、梅花中高等学校、大阪国際大学、関西大学で非常勤講師を勤め、2007年より近畿大学法学部特任講師となる。1997年より、多読指導を本格的に授業に取り入れ、高校生・大学生の多読指導に携わる。専門は英語教育（TESOL）。現在、日本多読学会会長。
著書：『英語多読・多聴指導マニュアル 英語教育21世紀叢書』（大修館）

[質問票回収]

- 15:10～15:50 質疑応答 【総司会】 国際言語文化センター教授 原田 登美
- 15:50～15:55 閉会の挨拶 国際言語文化センター教授 津田 信男
- 16:00 懇親会 甲南大学5号館1階 カフェ・パンセ

講演『外国語教育で多読を成功させるには』

近畿大学法学部講師 高瀬 敦子

大学生が外国語で書かれた本を沢山読み、楽しむ域に達するまで力をつけるには、かなりの時間を要するのではないだろうか。そのような疑問が頭にあり、たとえ多読の大切さや必要性を感じていても、授業でどのように多読を指導したらよいか悩む教師も多いことだろう。

今回の高瀬先生の講演は、そんな疑問に明確かつ具体的な答えを提示して下さり、効果的な多読の授業を可能にさせる非常に有益なものであった。氏の豊富な多読指導経験から学ぶことは数多く、80分間の講演は実践的な内容が盛りだくさんで、最初から最後まで絶えず参加者の心をひきつけた。

高瀬先生によると、ここ最近、特に関東地方に始まり、全国的に多読を推奨する動きが活発化してきているとのことである。それは大学における英語教育の域にとどまらず、小学生や中学生、また成人対象の場にまで普及してきている。従来の日本の英語教育に疑問をもっていたり、満足していない人は多く、毎年100名ほどの教師が多読を導入しているようだが、継続的な実施に困難を感じている人もいる。そこで、高瀬先生は私たちを多読成功への道へと案内するために、1. 多読の目的・必要性、2. 多読の効果、3. 効果的な多読指導法、4. 多読成功例の紹介、5. 多読用図書の紹介、について大変わかりやすくお話下さった。

■ 多読の目的・必要性

従来の学校における英語リーディングは、ひとつの話を文章ごとに区切って分析しながら読んでいくため「木を見て森を見ぬ読解」になりがちである。つまり、正確さ(Accuracy)に重点をおいた学習になっており、全体的な話の流れや内容が把握できないため、英語嫌いの学生を増やす要因にもなっている。語学学習には動機付けが大切だが、実際にアンケートをしてみると、だいたい中学2年、高校1年時で英語に苦手意識を持つ人が多いということだ。そして、そのような学習者は英文を和訳し、その日本語を覚えて英語の試験をなんとかクリアしてきているというのが現状である。これでは語学学習というより、科目としての勉強にすぎない。氏が教鞭をとっている関西大学、近畿大学においても、英語嫌いの学生が多く、中・高と6年も英語を勉強していくら文法等を理解していても、実際に英語を使いこなすことができない。やはり、言葉は泳いだり自転車に乗ると同じように、いくら理屈を教わっても自分で実際に体験して習得していかないと、本当の力が身につかないのだ。

したがって、英語の運用能力を高めるためには、多読で英語に触れる機会を増やし、基礎力をしっかりつけることが大切である。第一言語を習得するように、第二言語の学習もそれに近いことを行う必要がある。そのために、易しい本を沢山読み、基本的な語彙や文法を用いて書かれた文章でinputの量を増やし、それをintakeに結びつける。そのように学習したことを定着させていくと、リーディングのスピードや理解力が上がるだけでなく、リスニングの力も必ずといってよいほど伸び、人によっては、ライティング、スピーキング能力の向上につながることもある。また、学生の動機を高めるために最も重要なことは、楽しくて興味のある内容の本を選択させ、辞書を引かなくても自分の力で理解できる本を沢山読んで自信をつけさせることである。

■ 多読の効果

多読を行うと、文章を和訳せずに直読直解を行うようになるので、リーディングのスピードは必ず上がり、1分間に100語、慣れてくれば250語くらいまで読めるようになる学生もいる。また、1冊の中で同じ単語や表現が何度も登場するので、読めば読むほど語彙もついてくる。先行研究のLai (1993) や 野呂 (2008) においても、同様のことが証明されている。文法面では、特に「to-不定詞」や語順に関する知識が向上することが報告されている。氏が教える学生に実施したアンケートでも「形容詞をどこにつけたらよいか分かった」など、語順に関するコメントも見られた。そして、1冊の本を最初から最後まで読みきること、物語の理解力やリーディング・スタミナを養うことができる。

また、多読をすると不思議なことに、TOEICのスコア、特にリスニングの力が伸びる。文章を頭から読む癖がつくと、おそらく、耳に入る順で言葉を理解するようになり、集中力も高まるのではないだろうか。実際、近畿大学のある学生は、TOEICのための勉強を全くせずに、900点台までスコアを伸ばした。彼は外国に行ったことが一度もなく、アメリカの小学3,4年生対象の読み物やGraded Readersのレベル2~3の本をどんどん読みこなして力をつけたようだ。その他、多くの学生からもTOEICのスコアが伸びたという声が聞かれ、中には、それを多読の成果だと実感し、リーディングの授業が終わっても自ら多読を継続する学生もいる。また、氏の知人である理科の教師も600点台からなかなかTOEICのスコアが伸びなかったところ、多読をOxford Reading Tree (ORT) より始めてCurious George、Magic School Bus など、主にアメリカ・イギリスの児童書のシリーズを読んでいくうちに、スコアが760点まで伸び、英検準1級にも合格したという例もある。さらに、多読をしていると、英検やTOEICなどの試験を受けて自分の英語力を試したくなった、というように語学学習に対して積極性が高まるケースもある。

その他、沢山の本を読むことで異文化に対する理解も深まっていく。特に子供用に描かれた本は絵が魅力的なので、色々な発見がある。例えば、ある学生が、「左側通行の道路は日本だけだと思っていたら、イギリスでもそうだとわかった」と言うように、絵を通し

て異文化に触れることができ、イースターやハロウィン、クリスマスなどの習慣も絵と理解可能な文章で楽しく学ぶことができる。そして、易しいレベルの英語の本で得たこのような異文化知識が、後に高いレベルの本を読む際の背景知識となり、内容を理解する力も高まっていくという効果がある。また、ORTなどのイギリスの子供向けの絵本には、crossという単語がよく怒った顔と共に出てくるので、読んでいるうちにこの単語に出くわすと「怒った顔」が自然に頭に浮かぶようになる、ということもある。本の内容を誰かに話したくなったり、外国人に話しかけたい気持ちになったという学生もいたので、スピーキングの力に結びつく場合もあるのだろう。

■ 効果的な多読指導法

最近の学生は、アルバイトやサークル活動で忙しく、携帯電話でおしゃべりする時間はあっても、本を読んだり、外国に興味・関心を持ったりする人が減ってきているように思える。また、日本語で書かれた本ですら、一冊も読まないという学生もいる中で、英語の本を読むモチベーションを上げるのは簡単ではない。また、真面目に受験勉強をして大学に入った学生ほど、一語一句和訳しないと気がすまない。このような状況で多読を効果的に指導するには、まず、授業中に多読の時間を少しでも取り、そして、易しい文章をたっぷり読ませることで、辞書を使って和訳をしなくても物語の面白さが理解できる達成感や満足感を味わうことが大切である。

それでは、どの程度易しい本が効果的なのか。英語がよくできるクラスには、プライドが高い学生が多く、易しい本を読みながらなくてシェイクスピアを選んだりするので、個人で行う多読はまず持続しない。実際、Penguin Readersのレベル2や3（600～1200語）の本から読み始めると、一橋大学の学生でもあまり続かなかったという例がある。同じ教師がその後、電気通信大学へ移り、思いきり易しい絵本から始めたら、大変うまく行って学生の英語力が伸びたそうである。また、英語のネイティブ・スピーカーの教師が考える易しいレベルと実際に学生が辞書なしで読めるレベルの差もかなりギャップがあるようだ。日本人の学習者を対象に考案された、本の読みやすさのレベルを測るYLという基準があるが、それは、0.0～9.9まで難易度によって本をレベル分けしている。まず、和訳する癖をなくすために、YL0.1～0.3レベルの本から読ませ、最初の50～100冊はYL1以下のレベルで多読に慣れさせる。『英語多読ブックガイド』という本は、約1万3000冊の情報をYLレベルに従って分類しているので、大変お勧めである。

次に、どの程度のペースで読むと多読といえるのだろうか。『快読100万語！ペーパーバックへの道』という本があるが、1年間に100万語を読む学生は毎年クラスに1,2名いるかどうかである。今までの氏のクラスでは、授業の40～45分間を多読の時間に割けば、平均20～40万語、10～15分であれば平均15～20万語、授業外で多読を行う場合は平均5万～10万語、ひどいときは1万語程度であった。クラスのモチベーションの度合いにもよる

が、100万語はかなり難しいので100冊多読を奨励している。

効果的な読書時間については、先にも述べたが、たとえ10分でも授業内で読む時間を作ることが必要不可欠である。今までの氏の経験上、授業外でのみ多読を行った場合は、学生の英語力がさほど伸びず、思ったほどの成果は上がらなかった。多読初期の学生は適切な図書選択もできないため、ある程度、自律して読書ができるようになるまで、多少強制的に読書をする環境を与える必要がある。実際に、授業で読ませたクラスと授業外で読ませたクラスを比較した研究（データ）によれば、授業内での多読は1年で100冊を超え、授業外だと30～60冊程度である。また、語彙数に関しては授業内が30万語台なのに対して、授業外では10万語以下である。そして、授業外で多読を行う男子学生の読書量が最も少なく、授業内で多読をする女子学生が一番多くの本を読むという結果がでた。

■ 多読成功例の紹介

次に、多読が成功した例を具体的に紹介する。現在、武庫川女子大学附属高校1年の43名は、中1から中3までの3年間、週1回（50分）のペースでSSR（Sustained Silent Reading：授業内多読）を行った。その結果、中1で実用英語技能検定の準2級に3名が合格、中2の時に準2級が19名、2級が2名、そして、中3で準2級に35名、2級に4名が合格した。氏が教鞭をとっていた梅花高校でも、高2の生徒を対象に、週1回（45分）の授業で1年間のSSRを実施し、ORTの0レベルから多読を始めたところ、600語レベルの本が沢山読めるようになった。その結果、SLEP（Secondary Level English Proficiency）テストの伸びにも有意差が見られ、多読を行わなかった英語が得意なトップクラスの平均点をはるかに凌いだ。また、国立豊田高校専門学校の18名の学生に対して、5年間にわたって多読を週1回（45分）実施したところ、毎年TOEICのスコアが平均約40点伸び、多読開始前は平均350点だったが、多読後は550点にまで伸びた。

このように成功した例を見てみると、ある程度長期間にわたって、授業内で多読を継続することが必要である。中・高・大と続けて多読を実施できる環境が理想的だが、なかなか学校の方針やカリキュラムなどの関係で、授業中に多読を行い、それを継続することが難しいのが現状である。意外と英語の教師による抵抗が大きく、豊田高等専門学校で多読を支持しているのは数学や電気、コンピューターの教師である。

■ 多読用図書の紹介

先に述べたように、辞書に頼らず自分の力で読める本を選ぶことは、そう簡単ではない。最初は大学生がためらいそうな子供の絵本のようなものでも、読んでいくうちにこれなら読めるという気持ちになり、次も読んでみたいと思わせることが大切である。Leveled Readers (LR) という英語圏の幼稚園児、小学生用に書かれた学習絵本は、レベ

ルが低いものでも仮定法などが使われており、表現が自然で生き活きとしている。Graded Readers (GR) という英語を外国語として学習する人のために書かれた本は、学習者のために語彙や文法、構文などを制限して書かれているので利用しやすい。初期のレベルの本は、ほとんどが現在形の文章で書かれており、少し不自然に感じられる時もあるが、本のレベルが上がっていけば読み応えのするものが多い。LR の中でも、ORTは大変よくできている。語彙や文法事項の提示の仕方に工夫がなされており、同じ単語でも違う意味で出てきたり、絵にも魅力があって、トリックも施されている。その他、CDなどによる音声付の本もお勧めである。GR、LRの両方を使用しながら、レベルアップを図るのが効果的である。

(文責：吉田 佳代)